

目的 近年、日本においてもグループホーム(あるいはグループリビングと呼称)が、高齢者の新しい住まい方として注目されているが、住まいづくりにあたっては、先例である北欧の高齢者のグループホームを参考にしているケースは多い。デンマークでは福祉三原則に基づき、住まい手である高齢者の生活を尊重した住まいづくりが、ハードとソフト両面にわたり行われている。そこで、デンマークにおける最新のグループホームの実態を視察調査により明らかにし、今後の日本のグループホームづくりを考えていく上において、参考とすべき視点や導入可能な具体点を明らかにする。

方法 1999年9月にデンマークのオーフス市において、高齢者の住まいについての実態を視察調査した。本報告では、デンマークでは初めの試みである共同組合方式によるミュレパーケンのグループホーム、ティンホイの痴呆高齢者のためのグループホームを事例としてとり上げ、その実態と特徴について明らかにしていく。

結果 ミュレパーケンのグループホームからは、1.時間をかけた住宅建設前段階の居住者(居住予定者)同士の間関係や意識づくりの大切さ、2.居住後の住民会の組織づくりと運営、3.高齢期を活動的に過ごすための努力、4.自然をとり入れ緑豊かな居住空間づくりの成果等が明らかであった。また、ティンホイの痴呆高齢者のためのグループホームでは、日本ではまだほとんど実現されていないような色彩やインテリア上の細かい配慮が見られ、そこでの生活者である高齢者を重視した住まいづくりの視点において、今後の日本のグループホームづくりの在り方を見出すことができた。